福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

グローカル化として見たグローバル化：ミームに基づく文化進化論に 向けた試論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 細谷, 龍平 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10502

グローカル化として見たグローバル化
―ミームに基づく文化進化論に向けた試論―

細　谷　龍　平
（福井大学国際地域学部特任教授）

本論ではまず、国際関係論の一テーマとしてのグローバル化とその派生概念であるグローカル化に係る理論を取り上げます。そこでは国際社会の動態をグローバルとローカルの両レベルの連関として見る視点から、特に社会の諸現象を包含する広義の「文化」が、多様性と均質性が交錯する形で進化する構造に着目します。そして、そこに見られる生物進化の構造との共通性を説明するための理論仮説を、ミームの概念を使って立てます。

１．グローカル化論：グローバルとローカルの連関

「グローカル化」は、グローバル化から派生した概念で、英国の社会学者ローランド・ロバートソンが提唱者です（最近福井大学に来訪、講演しました）。グローバル化は1980、90年代に本格的に論じられるようになって以来、ビジネスや経済学の視点からのみ捉えられる傾向が強い中で、ロバートソン先生はより学際的に社会の仕組みや動き全体の文脈で考察してきています。社会学の理論として、まず人類学と繋がっています。それからグローバル化ないしグローカル化は空間軸が重要な要因ですので、地理学とも関わります。そのように社会をより包括的にとらえる視点は広い意味での「文化」の視点です。またグローバル化は、単に人、モノやカネ、情報の流れが増大して世界が物質的に一体化、統合されていくという一般的なイメージに限定せず、人の意識のレベルでも一体化が進んでいることを強調しています。しかしその結果は、多くの論者が言うように世界では色々な意味での画一化、普遍化、あるいは均質化がもっぱら進んでいるかと言うと、そうではなくて、同時に個別化、多様化も進んでいることに注目しています。同先生の有名な著書（1992年Globalization: Social Theory and Global Culture、「グローバリゼーション：地球文化の社会理論」）の中で提起されたグローバル化の定義は、「個別性の普遍化と普遍性の個別化との相互浸透を伴う二重プロセス」（Two-fold process involving the interpenetration of the universalization of particularism and the particularization of universalism）でした。

このようなグローバル化のメカニズムはどのように生まれてくるのかという考察を通して、先生はグローカル化の概念を初めて学術的なレベルで提唱されました。その発想を得られた源泉は実は日本にあります。日本の農業では古来各地方の天候や地理的条件に応じてそれぞれ独自の耕作法を編み出してきたことを「土着化」と言ってきました。先生は「土着化」と言う日本語の言葉を知って、そこからグローカル化の概念を思いつかれたのです。同時に70年代、80年代の日本企業は世界に事業展開する際に、各国、地域の消費者の傾向を調査し、それぞれに応じた製品を開発するというビジネスモデルを世界に先駆けて展開しました。このこともグローカル化ないしそれに類似した言葉で表現されはじめ、その後ビジネス用語として定着しています。ロバートソン先生はこういったグローカル化の概念をより一般的、本質的に、グローバルなもの（あるいは意識）とローカルなもの（同左）との相互浸透のプロセスと捉えました。これは上記のグローバル化の定義と重なり、実質、グローバル化＝グローカル化と見る「一元論」と言うことができます。

ではそのように見たグローカル化はどういう構造を持っているか。特に、社会のいろいろな事象を見ると、均質性と多様性（あるいは普遍性と個別性）が両方認められる場合が多いことが従来言われて来ています。様々な変数があって複雑極まりない社会のことですから、それらに一律に当てはまる理論を構築することは基本的に困難です。何かの理論を立てるとしたらそれは必然的に単純化されたものになります。しかし社会が変動するメカニズムの一部についてでも、それを説明するのに有用な理論ないし仮説を立てることは可能なはずです。均質性と多様性が両方見られる社会事象は確かに様々に存在します。さらに、長期のタイムスパンでの変動を見て行くと、均質性と多様性が相互に作用し合い、交互に派生しながら、循環的に累積していくメカニズムも見出せる場合があります。

具体例としては、社会学ではおなじみのマクドナルドのファストフードチェーンが生まれた経

緯、それにハンバーガーという食べ物自体が生まれた歴史を遡って見るとこの累積的循環の構造が浮かび上がります（図 1）。ここでは一点だけ、1970 年代から世界のファストフード産業をリードしてきたマクドナルドは、元は 1940 年にカリフォルニア州の小都市サン・バーナーディーノで生まれた 1 号店に遡るということを指摘しておきたいと思います。

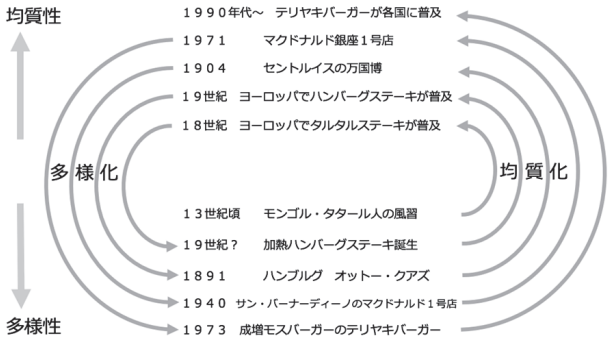

図１　ハンバーガーの発展史に見る
均質化と多様化のサイクル

グローバル化は、確かに最近の 40 年間くらいの間に顕著に進み、ポストモダンの社会学ではあたかもそれまでの世界とは一線を画す展開であるとの一般的な認識があります。しかし、その背景には、もっと長期に、何世紀、何千年にも亘って続いてきている人類文明の発展史があり、その底流には一貫して変わらない社会進化の原理があります。それは、グローバルなレベルとローカルなレベルとの連関の具体的なメカニズムに着目することでクローズアップされるはずです（注：ここでのグローバルとローカルは空間的にそれぞれどのレベルかということは一義的に決めない相対的な概念です）。

２．文化進化論：遺伝子進化との共通構造

このようにグローバル化＝グローカル化を考えることは、人類文化が長期にどう展開してきたかを取り扱う文化進化論に繋がります。

文化進化論には生物進化論との関係で大きく二つの学説の流れがあります。文化（注：広義の文化）の進化と生物（特に人間）の進化とが連動しているところに注目する流れ（二重相続理論）と、直接連動はしていなくても、文化進化と生物進化はその構造が似ていることに着目し、それを説明しようとする流れです。

前者の有名な例としては、人の成人におけるラクトース耐性（牛乳を消化する酵素の有無）と牧畜文化の発展との間に共進性が見出されるとの研究があります。

後者は、元々ダーウィン自身が指摘していました。先ほどのハンバーガーの発展史に戻って考えてみましょう。

イギリスの生物学者リチャード・ドーキンスは、ダーウィン以来の進化論における自然淘汰の仕組みの基本的な分析単位は人間などの生物個体ではなく、遺伝子そのものであるとの発展した進化論をその有名な著書「利己的な遺伝子」（The Selfish Gene）で広く世間に流布させました。同著の中で、複製子たる遺伝子が自己複製するプロセスが複製のエラー（突然変異）を経てたどる一般的な経過が語られている下りがあります（p342：2016, Oxford University Press, 40th Anniversary Edition）。紙面の都合上引用は割愛しますが、そこの「複製子」を「ハンバーガー」と読み替えると、ファストフードハンバーガーが、一つの種類が遍在する初期の状況から、ローカル化で多様性が出現するフェーズを経て、次の強力な新商品が支配的な広まりを見せるまでのサイクルの描写そのものになります。

この驚くべき類似性は単なる偶然によるものとはとても言えません。他方で、二重相続理論のように直接、間接に連動するものとして因果関係を検証することは基本的に不可能です。従って、ここには社会文化の変動と、生物の進化という全く異なる対象に、ともに働く共通普遍の原理があると考えざるを得ません。

３．ミーム論：社会の新しい分析単位

その原理を探求する上で一つの手がかりになるのは、ほかならぬドーキンス自身が「利己的な遺伝子」のなかで提唱した「ミーム」の概念です。

ミームの一つの定義は、人の脳から脳へ伝達され複製（模倣）される文化的情報です。その基本的な原形は人のアイデアや言葉です。少し発展した形態としては、音楽のメロディーや、服装のファッションが挙げられます。ファッションが時代とともに変わっていくプロセスは、先ほどのハンバーガーの例と同じく、生物進化と同様の構造を持っていると言えます。遺伝情報を複製によっ

て伝達する遺伝子が基底にある生物進化からの類推で、文化情報を複製によって伝達するミームのコンセプトを立てて、それが文化進化の基底にあるとすることは理にかなっていると考えます。

ミームのコンセプトに対しては様々な批判があり、また遺伝子とは異なる面も多々あります。しかし、最近はこれらの批判にも答える形で様々なミーム論が展開されています。それらは、心理学や、脳神経学、認知科学、心の哲学などに及び、また文化進化論の一つの系譜としても次第に定着してきています。

私は、ミームを次のように一般的に定義することで、グローカル化論と文化進化論とをつなぐ社会の基本的な分析単位の一つにし得るのではないかと考えています。

「社会において、一定の精度と頻度で、複製ないし模倣される観念、事物、慣習、制度など」

ここでは、社会を構成する基本的要素を便宜的に、観念（ideas）、事物（artifacts）、慣習（practices）と制度（institutions）の4階層で捉え、ベースとなる一番下の階層の観念をミームの基本形態とし、その上の各階層はミームが累積的に組み合わさって上位のミームを形成するという考え方に立っています（図2）。

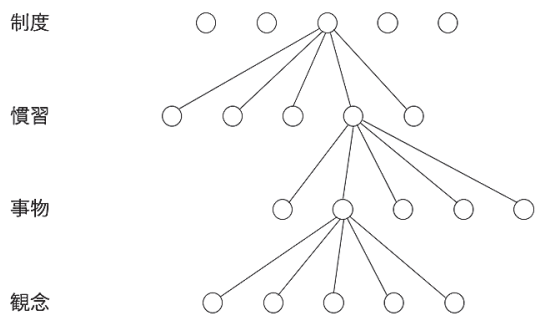

図2　ミームの4階層

この各階層のミーム同士の自己相似性に、各階層間で直接の連動はなくても文化進化の同様な構造が見られることを説明する鍵があります。

ところで、この4階層には人が入っていません。これは、生物進化論における基本的分析単位は、当初は人ないし生物個体だったのが、その後の理論の発展で遺伝子に取って代わられたことと通底しています。その本質は、人ないし生物個体は全て限られた寿命で死んでいくのに対し、複製子（遺伝子ないしミーム）のうちの強いものは半永久的に生き残っていくということにあります。

このように定義したミームが文化進化論とグローカル化論とをどう橋渡しし得るかを考えるため、ミームを基本に据えるグローカル化のモデルを立てました（図3）。

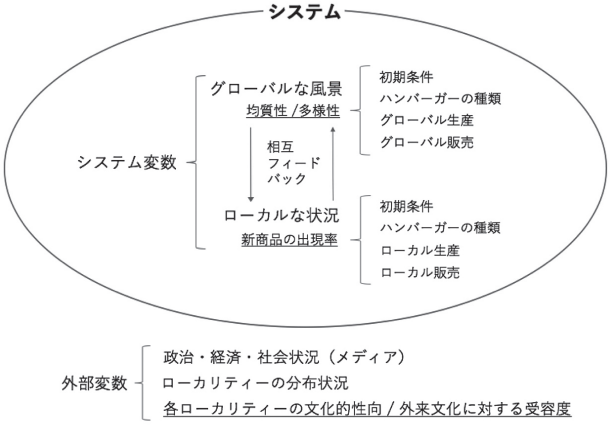

図3　ハンバーガー（事物）を例とする ミームに基づくグローカル化のモデル

紙面の関係で詳細説明は省略します。ここでは便宜上ハンバーガーという「事物」のグローバルセールズを例に記述していますが、ミームの各階層にわたって適用し得る原型モデルです。基本的に二つの相互に影響しあうシステム変数を含む「二次モデル」であることから、原理的に振動ないし循環する構造を表現できます。

このモデルは複雑な社会のメカニズムを必然的に単純化するものです。また全ての社会現象を説明しようとするものではもとよりありません。しかし長期のタイムスパンで考えた場合、そのかなり有意な範囲に適用し得るのではないかと考えています。そこではグローバルなレベルでの国際社会の諸現象と、ローカルなレベルの事象との連動関係の中に、均質性と多様性とが交錯する構造があることを想定しています。

その構造の基底には様々なレベルのローカリティーで生じている「変異」があります。均質性が支配的な局面は変異により次第に多様性を帯びる方向に変化します。変異種は、存続する力が弱く消滅して行くものもある一方で、そのローカリティーでは生き続けるものも出てくるからです。しかし、時には非常に強力な変異種が生まれ、ロー

カリティーを超えて、上位のローカリティー、さらには地球大にも広がり、それまでのグローバルスタンダードに取って代わるものもやがては出てきます。それは新たな均質性の局面を産みます。

そのような変異種がどういう状況下でどのようなローカリティーから生まれてくるかは、多分に偶然に左右され、また様々な社会的要因が関わって来ると考えられます。しかし本質的にはどのローカリティーも新しいスタンダードの芽となり得る変異を生むポテンシャルを均しく持っているということが、ある意味では当然のことですが、本論で改めて理論付けされる点です。

言い換えれば、ローカリティー（地域）こそがグローバル化＝グローカル化の現場であると同時に、源泉だと言えるのです。